

韓国・清溪川に見る
憩いの空間づくり
チヨンゲジョン

安間和奏

韓国・ソウルの中心部を東西に流れる清溪川が復元されてから約二十年経ち、どのような空間になっているのか紹介する。

清溪川

清溪川は朝鮮王朝時代に生活用水を排水する川として利用されており、悪臭が問題となっていた。そこで一九七〇年代に川を暗渠化する工事を開



都会の中に流れる清溪川

始し、川の上に高速道路が建設された。その後、老朽化した高速道路を撤去し、清溪川の復元工事が行われ、二〇〇五年に現在の姿へと生まれ変わった。復元後は様々なイベントが開催され、多くの人が集まるスポットとして注目されている。

ソウルアウトドアライブラリー

私が清溪川を訪れた時には、ソウル市主催の「ソウルアウトドアライブラリー」という屋外で本を読むイベントが開催されていた。四月〜十一月の週末にソウル広場、光化門広場、清溪川の各会場に、二千〜五千冊の本とクッションやベンチなどが設置される。カラフルな装飾や居心地の良さそうな設えに惹かれて近づいてみると、飲み物や食べ物や片手に本を読んだり、水遊びをする子どもを眺めながら談笑したりするなど、多くの人がくつろぎながらこの空間を楽しんでいた。ブースでは、図書館の会員登録を行った人に本の貸出も行っている。



くつろぎながら本や会話を楽しむ人々



設置されている本棚

訪れてみて

週末の混雑する都会の中心で、自然を感じながら無料で過ごせるスポットは貴重であり、清溪川が復元されてからの約二十年間、韓国の人々にとって憩いの空間になっていることが短い滞在時間でも感じられた。私自身も近くを通る度に階段を下りて川のほとりを散歩するほど、清溪川のファン

になっていた。

一方、清溪川は延長約十一キロあり、イベントが行われていたのはごく一部分で、全てを見たわけではないが、イベント会場以外では植栽が繁茂しすぎている箇所もあった。これらを放置していると雰囲気や治安の悪化につながる場合もあるため、木陰を残しつつ視認性を妨げないようなバランスのとれた管理が求められる。これは公共空間の共通課題でもあるため、今後の動向も見守っていききたい。

さいごに

帰国後、清溪川やアウトドアライブラリーのような空間が身近にあればいいなと思っていたところ、移動図書館の最新車両披露目イベントに参加する機会を得た。一日のみの開催ではあったが、会場となったサカエヒロバスには、ハンモックやベンチが置かれ、小規模ながらアウトドアライブラリーそのものであった。週末の名古屋駅や栄駅周辺は少し休もうと思ってもカフェ難民になってしまうほど、どこも人で溢れかえっているため、このような広場を活用した取り組みが広がれば多くの人に支持されるだろう。先進的な公共空間の活用事例から学んだことを、自分たちのまちにも取り入れていきたい。